

『万葉集』から見る
日本の古典 ⑧

獨協大学特任教授 城崎 陽子

聖徳太子 その3

先回は『万葉集』の「籠田山の死人を見悲傷して作らず歌」と異伝関係にある『日本書紀』の聖徳太子伝承を取り上げ、太子伝承が形成される次第をたどって見た。そして、『日本書紀』の聖徳太子伝承をさらに取り上げたが、紙幅の都合から充分に解説しないままとなっていた。今回は『日本書紀』の伝承について解説し、太子伝承にさらに分け入ってみたいと思う。

『日本書紀』上巻第五縁には「聖徳皇太子の異しき表を示したまひし縁」と題する説話が載る。なお、本文については先回掲載したのでここでは割愛する。

僧景戒の撰した『日

本書異記』の成立は弘仁十三年（八二二）を下限とすると、養老四年（七二〇）成立の『日本書紀』からおおよそ百年後の事である。地名は「片岡」となっており、これは『日本書紀』の所伝と等しい。太子は道に臥していた「かたみの人（病人）」を見ると、載っていた輿から降りて「俱に語りて問訊ひ、著たる衣を脱ぎたまひ、病人に覆ったという。そして、「遊観」しての帰り、「かたみの人」の姿はすでになく、太子は木の枝に掛かっていた衣を何事もなかったかのように再び着たという。周囲の人々はこれを怪しんで「病人が触れて穢れてしまった衣をなぜ再びお召しになるのですか」と太子にその訳を尋ねたが、太子は「そのことは言うな、お前たちにはわかるまい」と言ったという。また、その「かたみの人」が別の場所であつたことを聞き及んだ太子は、わざわざ岡本村（現在の奈良県生駒郡斑鳩町）の法林寺の東北の角にある守部山に「入木墓」と名付けた墓を作つて葬つたという。ところが、後日この墓を改めた

の、墓の口は開いていなかつたものの、遺体は無く、「墓の戸」に「斑鳩の富の小川の流れが絶えぬ限り、私は決してあなたさまのお名前を忘れない」と誓つて、墓の中に遺体が閉じられている。

一連の太子伝承のモチーフである「かたみの人（病人）」を「聖人」と看破する件や、「戸解」によつて、墓の中に遺体があつたといった件は『日本書紀』に等しいが、詠われた歌の部分は太子が路傍に臥している人を哀傷した歌ではなく、「か



聖徳太子伝承が残る富士山の山小屋

たみの人」が太子へ報恩感謝した歌に変化している。

ところで、『万葉集』や『日本書紀』にみえた聖徳太子の歌と、『日本書紀』にみえた「かたみの人」の歌が、問答のようなスタイルになるのが、例えば『三寶絵』である。『三寶絵』は円融天皇の永観二年（九八四）に尊子内親王のために源為憲が撰進した仏教説話で、『日本書紀』からおおよそ六十年後の作品となる。

爰ニ太子難波ヨリ京ニ帰給ニ、片岡山ノ辺ニ飢タル人ヲセリ。黒駒アユマスシテトマル。太子馬ヨリヲリ給テカタラヒ給。紫ノ御袍ヲヌギ給テ、此人ニヲホヒ給テ、歌曰

シナテルヤ片岡山ニ飯ニ飢テ臥セル旅人アハレ祖無斑鳩ヤ富ノ緒川ノ絶バコソ我ガ大公

ノ御名ヲ忘レメトイヘリ。太子宮ニ帰給テ、コノ人シマケリ。太子カサシビテ、フリヲサメ給。時ニ大臣達、此事ヲ非謗スル人七人アリ。太子コノ人クニ示給フ、片岡ニキテソノカタヲヲミヨ。トノ給ヘバ、ユキイタリテミレバ、カバネスデニナシ。棺内甚香シ。皆驚アヤシム。『三寶絵』中

『三寶絵』の所伝では「難波」よりの帰途「片岡山」で「飢タル人」に出会つた太子は、騎乗していた「黒駒」が前に進まなくなつたことでの「飢タル人」が聖人であることに気づき、「紫の御袍」を給つたとある。『三寶絵』では、『万葉集』や『日本書紀』に所伝されてきた歌謡が短歌形式に整えられており、これに『日本書紀』では「かたみの人」の報恩感謝の歌として記されていた歌

をあわせて問答形式の歌として載せられている点が伝承の新たな展開といえよう。『三寶絵』から二十年ばかり後に成立したとされる『拾遺和歌集』（勅撰集の第三番目）の「哀傷」の最後にも、この問答が載せられている。

そして、新たなモチーフとして「黒駒」が登場する。これは同じ『三寶絵』に「甲斐ヨリタテマツレル黒駒」と記されている馬である。この馬は、『三寶絵』には「神馬」とある。聖徳太子がこの馬に乗つたところ、「雲ニ入りテ東ニサリ給又（空を飛んで東の方に去つていった）」と記されている。平安初期からの聖徳太子伝承を集積して十世紀終わりごろに成立したとされる『聖徳太子伝暦』には「吾この馬に騎りて雲を踏み、霧を凌ぎ、直に富士獄の上に到る」とあり、聖徳太子の富士登拝伝承はこのころから語られていたこともわかるのである。

を

高尾山の昆虫
ウシヅラヒゲナガゾウムシ



虫の世界では科が違うのに似ている他人のそら似的な種がいて、これまでに何度か紹介していますが、ウシヅラヒゲナガゾウムシはなんと哺乳類の牛にそっくりなので驚いてしまいます。ウシヅラは牛面であり、一センチに満たないこの甲虫に牛が乗り移ってしまったような感さえます。幼虫はエゴノキの実を食べて成長しますが、幼虫が入っている実は釣りの餌として重宝がられ、釣具店で結構高値で販売されているようです。そんなこともあって、正式な和名はエゴヒゲナガゾウムシですが、成虫の姿を見たらウシヅラヒゲナガゾウムシの名が適切であると多くの人が思うことでしょう。

ヒガナガというくらい一見カミキリムシを思わせるような長い触角、そして頭部が垂直に下を向き、顔に当たる部分には耳状の一对の隆起があり、まさに牛の雰囲気を感じ出しています。これを可愛いと思うか、妖怪と感ずるかは意見が分かれるところかも知れませんが、奇虫であることは間違いありません。エゴノキを見つけたら、是非観察してみてください。

（撮影・文松島 孝）